

〈その他（評論）〉

ヨン・アイヴィデ・リンドクヴィストの 吸血鬼小説と映画化作品 —アダプテーションとリメイクにおけるプロットと表現の変化—

吉城寺 尚 子

【要旨】

ヨン・アイヴィデ・リンドクヴィストの小説 *Låt den rätte komma in* は映画化され、更にリメイク映画が作られた。プロットの骨子は保たれながら、登場人物のセクシュアリティを中心に、さまざまな変更がなされた。プロットと媒体の変更に伴い、作品の表現とそれが持つ意味も大きく変化する。

キーワード：ヨン・アイヴィデ・リンドクヴィスト、吸血鬼小説、映画、アダプテーション、リメイク、プロット、表現、セクシュアリティ

1. はじめに

スウェーデンの作家ヨン・アイヴィデ・リンドクヴィストによる小説 *Låt den rätte komma in* は2004年に発表されてベストセラーとなり、英語、日本語をはじめ各国語に翻訳された。2008年には同名の映画が制作されて好評を博し、2010年にはアメリカでリメイク版映画が制作された。本稿では、テキストが映像化されリメイクされるにあたっての変更点に注目し、作品の特徴と意味が大きく変化する様相を検討したい。

本稿では3つの作品をとりあげるが、それぞれの題名と翻訳を整理しておく。

(1) 原作小説：Ajvide Lindqvist, J. (2004). *Låt den rätte komma in*. Ordfront. 英語訳は、Ajvide Lindqvist, J., & Segerberg, E. (2004). *Let the Right One In*. Quercus. この他、*Let Me In* という書名のものなど、2004年中に数種類が出版されている。日本語訳は、ヨン・アイヴィデ・リンドクヴィスト『モールス』(上)(下) 早川書房、2009年¹。日本語訳はリメイク映画の公開に合わせて出版され、映画の日本語タイトルに合わせて『モールス』という書名にされたと思われる。本稿においては「原作小説」と呼称し、日本語版と英語版により検討する。

(2) 映画 (2008年)：原題は、*Låt den rätte komma in* (英語タイトル *Let the Right One In*)、ス

ウェーデン、ノルウェー、フランス制作。2008年1月26日、イェーテボリ映画祭にて公開。同年4月24日、アメリカにて公開。2010年7月10日、日本にて公開。日本語タイトルは「ぼくのエリ 200歳の少女」。本稿においては「映画『ぼくのエリ』」と呼称し、Alfredson, T. (Director). (2011) *ぼくのエリ：200歳の少女*. [DVD] により検討する。

(3) 映画 (2010年)：原題は、*Let Me In*、イギリス、アメリカ、スウェーデン制作。2010年9月13日、カナダのトロント国際映画祭にて公開。9月23日、アメリカにてプレミア上映。2011年8月5日、日本にて公開。日本語タイトルは「モールス」。本稿においては「映画『モールス』」と呼称し、Reeves, M. (Director). (2010). *モールス*. [DVD] により検討する。

原作小説と映画に共通する、核となるプロットは次のとおりである。郊外の集合団地に、12歳の少年が母親と暮らしている。隣室に少女と父親が越してくる。少年はいじめられっ子、少女は吸血鬼、父親のように見えた人物は、少女のために「血液狩り殺人」を実行する男だった。団地の中庭で出会った孤独な少年と少女は、やがて壁越しにモールス信号で連絡をとり合うようになる。二人の交流が進む一方で、街では猟奇的な事件が連発する。少年は学校でのいじめに対して拒否と反撃を覚えていくが、いじめもエスカレートしてゆき、ある夜、学校のプールで極点に達する。

2. 原作小説

原作小説は、英語版ペーパーバックで519ページ、日本語文庫版2巻で計767ページの長編である。物語の時代と場所は具体的で、1981年10月21日水曜日から11月13日金曜日まで、ストックホルム郊外の地区ブラッケベリで展開する。物語の主役は12歳の少年オスカルと吸血鬼のエリ、最も重要な脇役はエリと暮らす中年男性ホーカンである。ホーカンの性的志向は、のちの映画作品では表現されない。

地元中華料理店に出入りする中年のグループ（男性5人と女性1人）から犠牲者と目撃者が出る。彼らの一部は貧困、定職なし、アルコール依存、ゴミ部屋に引きこもりなど、現代社会の陰の部分の体現している。原作小説では、ラッケとヴィルギニアのカップルの物語、親友ヨッケと恋人ヴィルギニアを失い、吸血鬼への復讐を誓うラッケにまつわるサイドストーリーが展開する。

2本の映画においては省略される登場人物に、オスカルの年長の友人トンミがいる。彼はオスカルには親切だが、盗みも故買も薬物もやる不良仲間のリーダーである。母親の恋人で警察官のスタファンに大きな反感を抱いている。トンミとその母とスタファン、特にトンミとスタファンの間の確執を中心に、原作小説ではエピソードが展開するが、映画ではこの3人が省かれた。

学校でオスカルをいじめる同級生グループのリーダーがヨンニで、ヨンニには年長の不良の兄インミがいる。オスカルがグループのいじめに反撃してヨンニに怪我をさせたことが発端となり、やがて兄のインミが仕返しを主導して苛烈な「プール事件」が起こる。

2.1 原作小説におけるオスカルの造形

原作小説の舞台ブラッケベリは、ストックホルム郊外のベッドタウンとして開発された町で、いにしへの吸血鬼伝説とはおよそ無縁に見える場所である。中年グループに垣間見える現代社会の陰のほか、登場人物の家族関係は「母と子」の暮らしが目立ち、「父」の不在や別居が示される²。

主人公のオスカル少年は、最初はおおよそ魅力的とは言えない姿で描写される。太っているため「豚」と蔑まれ、いじめられる。「ピギー」（日本語訳、英語訳）と呼ばれ、豚の鳴き真似を強いるいじめが繰り返される。オスカルはそれ以上の暴力を避けるため、自らの鼻を押し上げて豚鼻にし、思い切り叫ぶ。また彼は失禁の癖を隠すため、パンツに「ピスポール」を仕込んでいる。知識や知性の点で、優れて大人びたところがあるオスカルは、猟奇事件の記事を収集し、いじめっ子を惨殺する自分を夢想し、万引きもすれば、ついには放火も行う子どもである。映画ではオスカルの外観が視覚的に変更され、非行の細部は省略または変更されている。

団地の隣室に越してきたエリとの交流によって、一方的ないじめられっ子だったオスカルの態度と行動は、拒否や反撃を覚え変化していく。更に、エリに対する感情も繊細に変化する。

エリは変わっている。普通の少女ではない。オスカルは早くからそう感じながらもエリに惹かれてゆく。「エリ、ぼくと付き合ってくれる？」オスカルの素朴な申し出に、エリは諾と言えない。女の子じゃないもん。子どもでもないし、大人でもない。男の子でもないし、女の子でもない。なんでもない。エリは尋ねる。

「付き合う子と何か特別なことをするの？」

「べつに？」

「ただふつうにするだけ？」

「うん」

エリはふいに幸せそうな顔になる。だったら、付き合える。エリの答えに、オスカルはお腹に静かな喜びが満ちるのを感じる³。

幼い恋の対象であると同時に、明らかに普通の少女ではないエリに対する複雑な感情を抱え、オスカルは数日後、担任の先生に問いかける。恋をしてるって、どうしてわかるの？…それが男どうしだったら？…ひとりの人間が、同時に女の子と男の子の両方になることができる？ どちらでもないとか？⁴ オスカルの淡い恋ごころはエリの正体を知っていくにつれ、性的など

まどいへ、恐怖と愛のない交ぜへと変わっていく。

2.2 原作小説におけるエリの造形：少年としての過去

隣室の少女エリと中年男は、吸血鬼と血液の調達係だった。オスカルはエリと親しくなるにつれ、その素性——エリが時代を超えて生きてきた吸血鬼であること、そもそもは少年であったこと——を知ることになる。

エリは少女に見えるが、200年前には少年だった。不老不死の吸血鬼となった経緯の最初の部分は、やがて犠牲者となる老女に、美しい話を、と請われてエリが物語る形で示される。むかし、貧しい農奴の美しい末息子が、「コンテスト」のために領主の城に連れて行かれました…⁵。

エリの昔話の続きは二日後の夜、エリがオスカルに接吻することで、自身の経験をオスカルに幻視・追体験させる。城の広間でエリ＝オスカルと子どもたちは贅沢な料理に群がり、遠くから親たちが心配そうに見ている。領主とおぼしき鬘と白塗りの男が、サイコロを振る。二人の唇が離れるとオスカルは夢から醒め、それがエリの身に起こった現実であると悟る⁶。

昔話の残酷な結末が目に見えるかたちとなってオスカルに突きつけられたのは、その翌日の夕方、エリがオスカルの家を訪ねた時だった。吸血鬼は招かれないとその家に入れない。オスカルが好奇心と少し意地悪な気持ちからわざと「入ってもいいよ」と言わなかったため、エリは全身から血を流して血まみれになる。オスカルは慌てて許可を出し、エリはシャワーで血を洗い流し、決心してオスカルに裸体を見せる。

脚のあいだには……何もなかった。割れ目も、ペニスもない。ただつるんとしているだけだ⁷。

エリは「少しぼくになってみてよ」と言い、オスカルに接吻する。幻視の続きでは、サイコロ籤に当たったオスカル＝エリは、追いつがる母親を引き離され、広間から引き出され、暗い小間で去勢される。恐怖と痛みの中で、オスカルは川で服を洗うエリの母と、何かを飲み、咬む男の幻影を見る⁸。

2.3 エリの「過去の物語」のイメージ源

原作小説ではこのように、200年前のエリが吸血鬼に変えられた経緯が断続的に明らかになってくる。しかしこの「昔話」は既存の吸血鬼伝承や文学との直接の関わりはなく、去勢された少年がなぜ、どのように吸血鬼となったのかを明確に語るものでもない。むしろいくつかの歴史と伝説、その版本挿絵や映像作品にイメージの源泉をたどれるように思える。

エリの少年時代が、1981年時点で220年ほど昔⁹だとすると、1760年頃のこと。国や地域は明示されないが、吸血鬼伝承ゆかりの東欧やバルカンのハプスブルク帝国領が想定されている

かもしれない。

人物や出来事のモデルはいくつか挙げられる。フランスの軍人貴族ジル・ド・レ男爵（15世紀）は、ジャンヌ・ダルクを助けて軍功をあげたのちは錬金術や黒魔術に耽溺し、数百人の若い少年を拉致・陵辱・虐殺したと言われる。宗教裁判にかけられたのち絞首刑となり、遺体が火刑に処された。

ハンガリーの伯爵夫人エリザベート・バートリ（16-17世紀）は、召使いの女性や、拉致してきた近隣の娘を拷問して虐殺した。犠牲者は数十人とも数百人とも言われる。伝承では、エリザベートが侍女を折檻して返り血を浴びたところ、血を浴びた皮膚が若返った。そのため若い女性の血を満たした浴槽で沐浴する習慣を得たという。この「血で満たされた浴槽」のイメージは、エリが休息し蘇生する場所として、原作小説の最後に近い部分で姿を現す。

少年の去勢という事象で18世紀当時ヨーロッパにおいて知られ、よく行われていたのは「カストラート」育成のための施術である。17-18世紀のイタリアで、カストラート歌手輩出のピークを迎えた。変声期・思春期前の施術が必要で、通常は8-10歳頃の男児に行われたという¹⁰。

史上最も高名なカストラートはファリネッリ（本名カルロ・ブロスキ、18世紀）である。父親の早逝による経済的問題と、カルロ自身の落馬事故により、施術が決断されたと言われているが、父親の没時、カルロは満12歳を10ヶ月過ぎており、去勢するにはかなり遅い年齢であった。そのため、もっと早く去勢されていた可能性もあるという¹¹。

カストラートの去勢施術としては、少年をアヘンで昏睡させたのち、氷水または牛乳に浸し、睾丸を処置するという方法がとられたという¹²。ファリネッリとその兄を主人公にした映画『カストラート』（1994年）¹³では、牛乳浴の場面が描写されていた。

エリを去勢し、吸血鬼にしてしまう恐ろしい領主は、次のような姿である。

…かつらだとしか思えないライオンのたてがみのような髪の方が、暗赤色の液体が入ったグラスを手にして、ゆったりと椅子に座り、

…唇の薄い小さな口は不自然なほど赤く、顔はチョークのように真っ白だ¹⁴。

18世紀の宮廷貴族にとっては、男女とも鬘や化粧は通常の身だしなみであった。それにしてもこの領主の化粧は、ピーター・グリーンハウエイの『ベイビー・オブ・マコン』（1993年）¹⁵に登場するコジモ3世（17-18世紀）の、黒い長髪、白塗りの顔に赤い口紅の顔を想起させる。この映画はストーリーも映像も歴史の再現ではないのだが、コジモ3世の異様な相貌とともに、真紅を強調した映像の色彩構成とグロテスクな文脈における「血」の表現は、エリの過去のグロテスクな描写に共通するイメージである。

2.4 原作小説におけるホーカンの造形：少年性愛者としての末路

エリの父親を装うホーカン・ベンクトソンの造形は、登場人物の中でも、のちの映画作品で

は最も大きく変えられたものである。彼は少年を愛する同性愛とヘベフィリアの性的嗜好を持ち、そのため過去には投獄され、学校教師の職を失った。ブラッケベリに来る前にエリと知り合い、魅了され、エリに隷従する。エリがオスカルと親しくなっていく、壁越しにモールス信号で語り合うのを知り、嫉妬に身を焦がす。

ホーカンはうつむいて、額を膝に休めた。バスルームの水音が止まった。もうこんな毎日にはがまんできない。彼は爆発寸前だった。欲望と、嫉妬で¹⁶。

エリはホーカンの欲望を利用して血液を手に入れようとするが、ホーカンは失敗を重ねる。獲物をスイミングプールの更衣室で漁るが、半裸の少年たちを覗き見て興奮し射精する。そして殺人は不器用に失敗し、自身の身元を隠すため、酸で自らの顔を焼く。

病院に運ばれ上階の病室に隔離されたホーカンに、エリは窓から対面する。ホーカンは空腹のエリに自らの喉首を差し出した。そして見張りの眼をかいめぐり、窓から投身する。

のちの映画ではここでホーカンの命が尽きるが、原作小説では終わらない。モルグに運ばれたホーカンの「遺体」はエリを求めて勃起し続ける怪物となり果て、病院の職員を惨殺し、団地の地下室でエリを強姦しようとする。からくも逃れたエリは、トンミが隠れていたのを知らずに、彼をホーカンとともに地下室に閉じ込める。

トンミが、母の恋人の警官スタファンに地下室で発見されたのは翌朝。気がふれて歌いながら、スタファンが射撃大会で獲得したトロフィーの台座で、かつてホーカンだった人体の塊——しかしまだ蠢いている——を叩き潰し続けていた。原作小説のホーカンとエリの対決からホーカンの最期までの場面は、スプラッタ映画にしたらさぞやと思わせる凄まじい描写だが、のちの映画で表現されることはなかった。

3. 映画『ぼくのエリ』

映画『ぼくのエリ』（2008年）の制作には、原作小説の作者リンドクヴィスト自身が脚本に参画した。1時間54分の尺で、エリとオスカルの物語に焦点を当て、二人に直接関わらないサイドストーリーを整理・省略している。

オスカル（字幕ではオスカー）の年長の友人トンミとその母、母の恋人スタファンの3人は、映画『ぼくのエリ』では省かれた。小説では一つの山場となる、トンミとホーカンとの対決がなくなったためと考えられる。

中華料理店に出入りする中年グループの中のカップル、ラッケとヴィルギニアは些細なきっかけから諍いを始める。怒って店を飛び出したヴィルギニアがエリに襲われ、吸血鬼となってしまう。ヴィルギニアは苦しんだ末に病院のベッドに拘束される。看護師に窓のブラインドを上げるよう頼み、最後は日光を浴びて絶命する。原作小説では、ヴィルギニアの苦闘と絶望の

過程は詳細に描写されるが、結末は次の1文で簡潔に表現される。

カシカシと音をたててブラインドが上がり、ヴィルギニアは火の海に呑み込まれた¹⁷。

映画『ぼくのエリ』では、二人の関係とヴィルギニアの苦闘、復讐を誓うラッケの怒りは、原作小説の筋をなぞりながらも簡略化されるが、「火の海に呑み込まれた」という一言は、10秒弱の短いながらも衝撃的な映像で表現される。ブラインドを上げるよう看護師に頼んだヴィルギニアの顔のアップに、光が射す。映像は病室全体をベッド足元から見た構図にかわる。ベッド上の体から火柱が上がり、炎は瞬間に天井をなめる。画面左側の看護師と、右側のドアから入って来たラッケが立ち尽くす¹⁸。

3.1 映画『ぼくのエリ』におけるオスカルの造形

映画『ぼくのエリ』におけるオスカルの外観は、原作小説の冒頭に示されるイメージとはだいぶ異なる。映画のオスカルは肥満ではなく、ピスボールもつけておらず、ジャンクフードを好み万引きをするような少年でもない。か細く色白で、幼く見える顔立ちに金髪の直毛をおかっぱに切りそろえている。漆黒の波打つ髪と濃い眉、強い視線を持つエリとは対照的な色彩と顔立ちだが、どちらも外観のジェンダーは中性に寄っている。

原作小説で繰り返される、豚と呼ばれ鳴き真似を強いられるいじめは省略されるが、冒頭近く、コンニ（原作小説ではヨンニ）に「賢いブタちゃん」（日本語字幕）と呼ばれて鼻を押し上げられ、指で弾かれる場面がある¹⁹。

3.2 映画『ぼくのエリ』におけるエリの造形

原作小説では強烈な幻像として描写されるエリの過去の物語は、映画では映像表現はされない。オスカルの家に入ってもいいよと言わなかったらどうなるか、オスカルは試し、エリは血まみれになる。オスカルは慌てて許可を出し、エリを抱きしめる。「私を受け入れて」と言うエリの顔は、一瞬、年老いた老婆の相貌になり、長い時代を生きてきたことが暗示される²⁰。

血まみれのエリはシャワーを浴び、オスカル之母の古い服を借りる。エリの着替えをのぞくオスカル。顔のアップ。ワンピースをかぶるエリの下半身のアップ。目を見張るオスカル。エリ下半身の去勢の証拠は、このとき1秒ほどの映像で示される²¹。「割れ目も、ペニスもない。ただつるんとしている」²²「[股間の]真ん中の青白い肌にかすかなピンクの箇所が見えた。傷跡が。」²³という原作小説の描写がそのまま映像化されている²⁴。

ところが、日本で入手できるDVDでは、この場面のエリの股間にボカシが入っている。原作を知らない鑑賞者にとっては、そのため、この重要な場面の意味が理解できない。性器が映されているわけではないこの部分に、なぜボカシが入られたのか理由は不明で、理解に苦しむ²⁵。日本版映画の「200歳の少女」（傍点は引用者による）という副題も、ストーリーの根幹につい

て誤解を招くものになっている²⁶。

3.3 映画『ぼくのエリ』におけるホーカンの造形

ホーカンが少年に魅せられる同性ヘベフィリアであり、少年としてのエリに強烈な性的欲望を抱き、少年としてのエリはそれを利用していたという経緯は、映画では全て省かれているが、暗示的な細部の描写は残っている。

結果的に失敗に終わり、最後の犯行となる殺人の準備をしながら、ホーカンはエリの顔を見ずに「お願いがある。今夜はあの少年に会わないでくれ。頼む」（日本語字幕）と言う。振り向いて、エリと向かい合う二人の顔のアップ。エリは左手でホーカンの右頬を、実に優しく撫でる。ホーカンは目を閉じ、うっとりする。しかしエリは返事をせず、黙って去る。悲しげに見送るホーカンの顔²⁷。ホーカンの焦がれるような性欲やオスカルへの嫉妬の痕跡は、原作を知らなければ読み取れないだろう。

少年を狙って失敗したホーカンは酸を被り、病院でエリに自らの首を咬ませたあと、窓から投身する。原作小説と異なり、映画ではホーカンの登場はここで終わる。

4. 映画『モールス』

映画『ぼくのエリ』がヒットし、2010年にリメイク版『モールス』（1時間56分）が制作された。物語の舞台は米国ニューメキシコ州のロス・アラモス、時代は1983年3月に移され、登場人物の名前も変えられた。

映画『ぼくのエリ』で省略されたトンミとその母とスタファンの3人は、『モールス』でも同様に省略されたが、主人公のオーウェン（＝オスカル）がアビー（＝エリ）を団地の地下室に案内したとき、「この建物に住んでたトミーって子が学校の仲間とここでお酒やタバコをやってたんだ…でも引っ越した」（日本語字幕）²⁸と、名前だけが言及されている。

原作小説と映画『ぼくのエリ』では、オスカルが別居中の父親を訪ね、その振る舞いに疎外感を強めていく孤独な状況が描写されるが、映画『モールス』では、父親はオーウェンと通話する電話の声として登場するのみである。

中華レストランに集っていた中年グループとそのサイドストーリーも省略された。グループから出る犠牲者は、オーウェンの団地の住人と警察官に替えられた。彼らには物語は与えられないが、殺され方のパターンは一貫しており、その映像表現は『ぼくのエリ』を踏襲しながらもVFXやホラー映画の表現技法を駆使して、さらに過激なものとなっている。

ヨッケは夜道のトンネルのような通路で、歩けない子どものふりをしたエリを助けようとして襲われる。映画『ぼくのエリ』では最初、カメラは遠くに引き、しがみついた吸血鬼とヨッケの格闘はシルエットで示される。映画『モールス』でも同様の構図を用いながら、吸血鬼の動作はより獣的で異常に素早く、格闘時間も長い²⁹。

映画『モールズ』の女性犠牲者（クレジット名はヴィルギニア）の病院での最期も、VFXを多用してより凄惨で長時間の場面としている。彼女は血に飢えて自分の腕に咬みついている。看護師が来て、ブラインドの紐を引く。原作小説や映画『ぼくのエリ』のように、自殺のために頼んだわけではない。顔のアップに光が当たると、発疹が出て瞳の色が変わっている。吸血鬼として人を襲うときの、エリの変貌と同じである。叫び狂う体から煙が立つ。看護師が駆け寄ると大きな炎が出て、看護師にも燃え移る。カメラが引き、病室全体が映ると、ベッドと看護師から大きな炎が立ち、病室全体に燃え広がる。室内に入ろうとするラリー（男性パートナー）と、それを止めようとする警察官³⁰。

原作小説と映画『ぼくのエリ』では、ヴィルギニアの死により吸血鬼への復讐を決心したラッケが、最後に自宅の浴槽で眠るエリの居所を突き止める。が、オスカルがラッケの気をそらせた隙にエリに襲われる。原作小説では、オスカルはエリの捕食現場を見ないように、リビングに移動する。そして悲鳴がやんだ後の物音を聞かないよう、ハミングを始める。

映画『ぼくのエリ』では、ラッケは浴室で背後からエリに襲われ、オスカルはそっとドアを閉めて去る。細く空いたドアの隙間から、格闘場面が見える。やがてラッケの手がドア外に伸び、枠に血の跡をつける。エリが貪る音。やがて血まみれのエリが、オスカルの背後から姿を現す³¹。

映画『モールズ』では、父親（＝ホーカン）の事件を調べていた警察官がラッケの役割を果たし、物語終盤に吸血鬼の犠牲となる。銃を構え、ひと気のない（しかし吸血鬼が眠り、少年が潜む）居室を警察官が調べていく。次々と部屋を探索する警察官の視点での緊張が伝わる。静寂の中、いきなり足元に飛び出す玩具。浴室ドアを開ける寸前まで、じりじりと緊張を高める音楽。突然襲われるショックと音響効果。大きく開いたドアから見える格闘場面。夥しい流血。この場面はとりわけ、ホラー映画の典型的表現に満ちている。血まみれの警察官とオーウェンは、至近距離で目を合わせ、やがてオーウェンは、静かにドアを閉める³²。

4.1 映画『モールズ』におけるアビー、父親、オーウェンの造形

原作小説、映画『ぼくのエリ』と映画『モールズ』との最大の違いは、吸血鬼アビー（＝エリ）が去勢された少年という過去を持たないことである。アビーの外観も、とうてい少年だったようには見えない。原作小説にあるように、オーウェンが「付き合ってくれる？」という「私は女の子じゃない、何者でもない」と答えるが、それはこの映画の中では「人間の少女ではない、吸血鬼だ」という意味に受け取れる³³。DVD『モールズ』に収録された未公開シーンには、アビーが遠い過去に暴力を受ける場面がソフトフォーカスで暗示的に表現されている。マット・リーヴス監督の音声コメントによると、この場面を使用しなかったのは、話の流れに合っていなかったためとのことである。

映画『ぼくのエリ』で、オスカルがエリの下半身をのぞき見て息を呑む場面の名残りというのか、オーウェンも同じ構図でエリの着替えをのぞく。が、その表情は冷たく硬く、オーウェ

ンの気持ちをはかりかねる場面である³⁴。これは映画『ぼくのエリ』とは違い、『モールス』では最初、去勢を暗示する暴力場面を入れ、オーウェンが幻像を見た後という設定だったのかもしれない。しかし結果的には、少年としてのアビーの過去は、完成作品からは捨象された。

それと連関しているかどうかわからないが、オスカルをいたぶっていたキーワードの「豚」は消え去り、オーウェンに対しては「女の子」(Girl)が、ののしり言葉として繰り返し使われる。

映画『ぼくのエリ』においては、吸血鬼としてのエリの変貌や変身は、VFXを極力用いずに表現している³⁵。原作小説では、エリが吸血鬼として顔が変わり、唇がめくれ、歯や鉤爪が鋭くなる様子が描写されるが³⁶、映画『ぼくのエリ』では、エリはそのような変身を遂げない。対照的に映画『モールス』ではVFXを多用し、原作小説の記述を超えるアビーの変貌と変身を見せている。

オスカルが自分の手を切り、エリと「血の契り」をしようとしたとき、原作小説ではエリの変貌は抽象的に描かれる。「突然エリの目に何かとびこんできて、それをゆがめ、オスカルが知っている少女とはまったく違うものに変えた」³⁷。映画『モールス』では、アビーの顔に斑点が浮き上がり、眼窩がくろずみ、眉骨が出て眉毛がなくなり、瞳の色が変わり、ホラー映画の金字塔『エクソシスト』(1973年)の少女リーガンをほうふつとさせるような変貌を遂げるのである³⁸。

映画『モールス』におけるホーカン役は名前を持たず、「父親」とクレジットされる。映画『ぼくのエリ』のホーカンと同様に、やがて失敗に終わる殺人の準備をしている場面での会話。「出かけるの?」「他に方法が?」アビーは「父親」の背後からそっと自分の手を彼の肘に添える。「父親」が振り向くと、アビーは右手を彼の左頬に当てる。「父親」は自分の左手で彼女の右手を包む。「もうあの少年に会うな、頼むから」アビーは答えない³⁹。これはまるで、父親の心配をする娘と、娘の心配をする父親の会話である。原作小説のホーカンの性愛や欲望や嫉妬、エリの嫌悪や生きるための打算は露ほども感じられない。

5. プール事件

いじめへの反撃を覚え、ヨンニに大きな怪我をさせたオスカルに対し、仕返しも苛烈になる。原作小説では、地下鉄駅のホームに突き出されて死にかけていたオスカルは、夜の教室でヨンニと自分の机に火をつけ、ボヤを起こす。ヨンニは机の中に、別居の父親が大切にしている写真アルバムを兄インミから借りて入れていたが、それも焼失したことが暗示される。

オスカルは夜のトレーニング教室のスイミングプールで、インミとヨンニたちにつかまる。プールに沈められ、5分間潜っていらなければ、片目をえぐり出すと脅され、ナイフを突きつけられる。プールでのインミの度外れた凶暴さの理由として、原作小説では薬物の影響もほのめかされている。オスカルは空気を求めてもがきながら、このほうがいい、片目をなくすよ

りも、と思っている。そこに、プールのガラス戸を激しく叩く少女。「入ってもいいよ」と言われると、強化ガラスの窓が粉々に砕け散った。

映画『ぼくのエリ』『モールス』には、地下鉄ホームと教室放火の場面はない。オスカル（オーウェン）が教室に火をつけるかわりのように、体育教師をプールから誘い出す計略として、いじめっ子たちが屋外でボヤを起こす。

原作小説には、ガラス窓が割られた後、プールで何が起こったのかの描写はない。次章「エピローグ」では警官のホルムベリが翌日、生徒たちの話をなんとかまとめようとしている。彼らによれば、オスカル・エリクソンは天使に助けられた。その同じ天使が、ヨンニとインミの頭を引きちぎり、プールに落とした⁴⁰。

映画『ぼくのエリ』では、水中のオスカルの前を誰かの頭が横切り、傍らの水面を誰かの足が走る。背後に首が投げ込まれる。オスカルの髪をつかんでいた腕が千切れて沈む。誰かの手がオスカルを水面に引き上げる。エリの目がアップで映り、オスカルとエリが微笑みあう。カメラはプール全景を映す。プールサイドに3人の死体が伸び、一人が座り込んで泣いている⁴¹。

映画『モールス』では、水中のオーウェンの背後の水面を、誰かの体が走り、黒い血が水中に広がる。ケニーの兄（＝インミ）の首が水中を漂い、オーウェンの顔の前を沈んでゆく。誰かの上半身が水面下を走り、オーウェンが水面に顔を出す。阿鼻叫喚を聞きながら、オーウェンは伏して水を吐く。血まみれの足が近づき、オーウェンが見上げる。穴の開いたガラス窓。血の広がる無人のプール⁴²。

6. エンディング

原作小説「エピローグ」には、ホルムベリの思案に続いて列車内の情景が記される。

ストックホルム発カールスタード行きの列車内で、車掌が少年の切符を切る。少年は古めかしいトランクと箱を持っている。車掌は尋ねる。どうやってこれを全部持つつもりなんだい？手伝ってくれる人が来るんだ、あとで。車掌は思う。おれがあんなにたくさんの荷物と座っていたら、あんなに嬉しそうな顔はできないだろうが。しかしまあ、若いときはまた違うのかもしれん⁴³。

映画『ぼくのエリ』は、夜の雪に続く朝の列車内の情景で、座席はほとんど空である。カメラが右に移動すると、オスカルが映る。車掌は来ない。傍らの箱から、モールス信号を叩く音。オスカルも箱を叩いて返信する。

映画『モールス』の列車内では、車掌が来てオーウェンの切符を切る。「そのトランクは君

の？ (That trunk yours?)」という車掌の問いに、オーウェンは黙って頷く。車掌は去り、トランクからモールス信号。オーウェンも返信する。お菓子を食べて、小声で歌う。“Eat some now, save some for later…”

7. 古い夢は葬って

リンドクヴィストは2006年に中短編集 *Pappersväggar* (*Paper Walls*) を出版した。その英語版 *Let the Old Dreams Die* が2012年に刊行される際、原作小説の続編にあたる短編「古い夢は葬って」が追加された⁴⁴。中短編集の日本語版は『ボーダー 二つの世界』⁴⁵と題して英語版から重訳された。

「古い夢は葬って」は、ブラッケベリの地下鉄駅で長年改札係を務めた「わたし」の回想のかたちをとる短編である。語り手はオスカルを見知っており、「プール事件」の翌未明にも幸せそうなオスカルを見かけていた。ストックホルム発カールスタード行き電車内でオスカルの切符を切った車掌のステファンと、「プール事件」後のオスカル失踪の捜査を担当した警察官のカリンはのちに結婚し、事件の数年後から語り手との付き合いが始まる。四半世紀以上のちになって、語り手はステファンから、事件当時の話を聞く。

カールスタード駅でシフトを終えたステファンは、ストックホルムに戻る電車を待ちながら散策し、駅舎の横の林で少年と黒髪の少女を見かける。ナイフを手にした少女と目が合い、殺されると了解した刹那、ステファンを呼ぶ警備員の声に救われた。

今では高齢と病により余命僅かとなったステファンとカリン夫妻は、バルセロナに向かった痕跡を残して姿を消す。語り手は夫妻不在の家で、その理由を暗示する写真を発見する。2008年9月にバルセロナで撮られたある家族写真の後景に、偶然写っていたオスカルと黒髪の少女。

…写真のオスカルはだいぶ痩せていて、失踪中のその体はかなり引き締まっていた。…何も知らずに笑顔を浮かべる一家の背後を移動するふたりは、どこか威嚇するような雰囲気をかもしている。まるで捕食動物のようだ⁴⁶。

リンドクヴィストによる中短編集の日本語訳『ボーダー 二つの世界』には、「スウェーデン語版『ボーダー 二つの世界』より」と題された短い文章が載せられている⁴⁷。この題の意味が不明で説明もないのだが、次のような経緯のようである。

2006年に中短編集 *Pappersväggar* (*Paper Walls*) が出版された。2011年には短編“Låt de gamla drömmarna dö” (古い夢は葬って) ほかさまざまな文章を収めた (中短編集ではない) 1冊が、*Låt de gamla drömmarna dö* の書名のもと、スウェーデン語で出版された。2012年に中短編集 *Pappersväggar* (*Paper Walls*) の英語版が出版されるとき、短編“Låt de gamla drömmarna dö” (古い夢は葬って) の英訳を加え、書名を *Let the Old Dreams Die* として出版された。日本語版『ボー

ダー 二つの世界』は、この英語版からの重訳である。つまりこの文章は、「スウェーデン語版『ボーダー 二つの世界』」につけられたものではなく、「スウェーデン語版〔の短編?〕「古い夢は葬って」」に付けられたあとがきが、英語版 *Let the Old Dreams Die* に翻訳転載されたものであろう⁴⁸。

上記の短文にはリンドクヴィストが、自身も制作に関わった映画『ぼくのエリ』の完成版を2008年のヨーテボリ映画祭で観たときの印象が記されている。映画を称賛し、監督に大いに謝意を表明しているが、「心にひっかかったことがひとつだけあった。エンディングだ。[……]自分で脚本を書いたのに、ドラケン映画館で観るまで、エンディングが暗示する意味に気づかなかった。オスカルが次のホーカンになるということだ」⁴⁹。

リンドクヴィストは、原作小説では敢えて、結末は読者の解釈に任せるようなかたちにしてあり、映画のような解釈もあり得ると言う。「ただし、私のエンディングではない」(傍点は引用元文献による)⁵⁰。「古い夢は葬って」を書いたのは、映画のエンディングに対して、原作者自身のヴァージョンを示したかったためだという⁵¹。

たしかに、原作小説におけるホーカンの同性へベフィリアとしての、愛というより性的欲望の終わり方と、オスカルの性とは別次元に向かう愛とを比べると、オスカルが「次のホーカン」の役割を引き継ぐという連鎖は考えにくい。しかし映画『モールス』では、この連鎖がさらに強調される。オーウェンがアビーの部屋で、古い写真を見つけるが、そこにはオーウェンと同じ年頃の「父親」が、アビーと並んで写っていたのだ⁵²。

では、原作者による「私のエンディング」は何を意味しているだろうか。原作小説の終わりと同様に「古い夢は葬って」も、読者の想像に任せる開かれた終わり方になっている。

ステファンによると、カールスタードで目撃した少年と少女は手をつなぎ、少女はナイフを持っていたという。このときオスカルとエリは、手に傷をつけてその傷を合わせ、互いの血を混ぜる「血の契り」をしていたのだ⁵³。かつてオスカルがエリの正体を知らずに「血の契り」をしようとしたとき、エリは激しく拒絶してオスカルを遠ざけ、オスカルの傷から滴った血を四つん這いで舐めるというショッキングな出来事があった。オスカルはそれにより、エリが吸血鬼であることをはっきりとさとする。地下鉄ホーム事件の後「きみも同じようになりたい?」というエリのおずおずとした申し出に対し、オスカルはためらいながらも否定している⁵⁴。しかし、カールスタードで血の契りを行うことにより、オスカルはエリと同族になったのだろう。

車掌のステファンは、オスカル失踪事件の聴取をしていた警察官のカリンに、少年と少女がどのように手をつないでいたかを、自分とカリンの手で実演してみせた。そのアクションが二人を結びつけ、愛で結ばれた夫婦としての長い年月の始まりとなった。彼らは年をとっても、いつも手をつないでいるような夫婦だった。

ステファンとカリンはオスカルとエリを探しに、バルセロナに行ったのか。彼らを見つけたのか。高齢のカリンと、末期ガンのステファンのその後は、わからない。

8. 結び

数百ページのテキストから2時間前後の映像を制作するには、必然的にさまざまな要素を取捨選択・整理凝縮することになる。逆に、テキストに記述されないことを視覚化する必要も出てくる。

リンドクヴィストの原作小説が映像化されるにあたり、映画『ぼくのエリ』は、小説の基本的なプロットを保ちながら、特にホーカンの同性ヘベフィリアとその末路のグロテスクな表現を避けた。映画『モールス』ではさらに、吸血鬼の少年としての過去と暴力的な去勢の表現も割愛された。

原作小説では、テキストで描写しないことにより、かえって読者の想像力を呼ぶ効果が使われている。ヴィルギニアが燃える場面や、「プール事件」がその例だが、文字で書かれていないそのような場面こそ、映画では迫力ある視覚・映像表現が創造される。

映画『ぼくのエリ』では、CGやVFXの使用が比較的抑えられ、代役なども使われていたようである⁵⁵。対照的に映画『モールス』はCGやVFXを多用し、非現実的で超常的な場面を作り出している。

したがって映画『モールス』は、原作小説からではなく映画『ぼくのエリ』からの場面引用がいくつもある一方で、アビー(=エリ)の変容など、原作小説にありながら映画『ぼくのエリ』が視覚化しなかった描写を、増幅して再現している部分もある。

原作小説の「エピローグ」は、結末の明確でない開かれた終わり方をしていて、映画『ぼくのエリ』が暗示した一つの解釈(オスカルが次のホーカンになる)を、映画『モールス』はさらに明確に示した。それらに対する応答として、原作者は続編「古い夢は葬って」を書いた。原作の「開かれた結末」は異なる解釈を生み、美しいコーダをも生み出したが、そのコーダの結末もまた、開かれたドアの奥に見えるドアのように、開かれている。

【注】

¹ WorldCat.orgでは約20カ国語の翻訳版が確認できるが、日本語版のデータは確認できない(2025年9月15日閲覧)。なお、日本語版はスウェーデン語版からでなく、英語版から翻訳されている(富永和子「訳者あとがき」, リンドクヴィスト, 2009², p.407.)

² オスカル、トンミ、いじめっ子のヨンニはいずれも母親と暮らし、父親は別居か亡くなっている。

³ リンドクヴィスト, 2009, pp.281-282.

⁴ リンドクヴィスト, 2009, pp.310-312.

⁵ リンドクヴィスト, 2009, pp.259.

⁶ リンドクヴィスト, 2009², pp.90-91.

⁷ リンドクヴィスト, 2009², p.209.

- ⁸ リンドクヴィスト, 2009², pp.216-220.
- ⁹ リンドクヴィスト, 2009, p.213.
- ¹⁰ Wikimedia Foundation. (2025, August 13). *Castrato*. Wikipedia.
<https://en.wikipedia.org/wiki/Castrato>によると、Valeria, Funucci (2003). *The Manly Masquerade*. London. p.253.
- ¹¹ Wikimedia Foundation. (2025b, August 25). *Farinelli*. Wikipedia.
https://en.wikipedia.org/wiki/Farinelli#Early_years
- ¹² <https://en.wikipedia.org/wiki/Castrato>によると、Valeria, Funucci (2003). *The Manly Masquerade*. London. p.245.
- ¹³ Corbiau, G. (Director). (1994). *Farinelli* [Film]. Stéphan Films.
- ¹⁴ リンドクヴィスト, 2009², pp.90-91.
- ¹⁵ Greenaway, P. (Director). (1993). *The Baby of Mâcon* [Film]. Allarts.
- ¹⁶ リンドクヴィスト, 2009, p.183.
- ¹⁷ リンドクヴィスト, 2009², p.311.
- ¹⁸ DVD 『ぼくのエリ』 1:21:27-1:21:35.
- ¹⁹ DVD 『ぼくのエリ』 0:06:15-0:06:30. なお、DVDに所収の特典映像 (Deleted Scene) に、原作小説に比較的近い暴力場面が収録されている。トイレの床に押し倒され、鼻を押し上げられて鳴き真似を強いられる。トイレから出るオスカルの手には、ピスボールらしきものが握られている。このシーンは採用されなかった。
- ²⁰ DVD 『ぼくのエリ』 1:25:28-1:25:37. 年老いたエリ役は、別の俳優 (Susanne Ruben) が演じている。
- ²¹ DVD 『ぼくのエリ』 1:26:48.
- ²² リンドクヴィスト, 2009², p.209.
- ²³ リンドクヴィスト, 2009², p.222.
- ²⁴ マネキンで撮影されたという逸話? が、IMDbに投稿されている。本稿筆者は以前 Youtube で、ボカシのない映像を公開している動画 (スペイン語字幕) を視聴したことがあるが、その後動画は削除された。
- ²⁵ 映画 『ぼくのエリ』 は、映倫により PG12 に指定されている。「肉体損壊等刺激的な暴力描写がみられるが、親又は保護者の助言・指導があれば、12歳未満の年少者も観覧できます」とある。なお、映画 『モールス』 は R15+ 指定で「刺激の強い殺傷・出血・肉体損壊・惨殺死体・強烈ないじめ等などの描写がみられ、標記区分に指定します」とのことである。Motion Picture Rating (Motion Picture Association) においては、どちらの作品も Sex & Nudity は Mild、Violence & Gore は Severe に分類されている。
- ²⁶ DVD を販売している Amazon の「商品の説明」には、「ヴァンパイア版「小さな恋のメロディ」」というコピーがついているが (<https://amzn.asia/d/8TNasZN>、2025年10月11日閲覧) 映画の日本公開時からこのコピーが広まり、誤解を助長していたように思える。映画 『小さな恋のメロディ』 (1971

年)でマーク・レスターが演じた、金髪色白の愛らしい主人公(11歳)からの連想で作られたキャッチコピーだろうか。

²⁷ DVD『ぼくのエリ』 0:42:50-0:43:25.

²⁸ DVD『モールス』 1:13:54-1:14:14. “This kid that used to live in the building, Tommy, he would come down here, and drink and smoke with his high school friends, and when they weren’t here, he would play with me ping pong. He was really cool, but when he had to move away.”

²⁹ 『ぼくのエリ』で、エリがヨッケを襲う場面は40秒ほどあるが、地下道で格闘するシルエットが8秒、目撃者イエスタのアップが2秒、土手でのしかかる場面が6秒、カメラが寄り、エリが食べる場面が23秒。『モールス』では、15秒ほどの格闘場面の人間離れした動きはすべてCGで作られており、DVDの特典映像でそのプロセスが紹介されている。また、犠牲者を食うアビーが顔を上げると、グロテスクに変貌している。

³⁰ DVD『モールス』 1:24:53-1:25:23. DVD『ぼくのエリ』の同場面は8秒ほど。

³¹ DVD『ぼくのエリ』 1:32:41-1:33:22.

³² DVD『モールス』 1:32:50-1:37:26.

³³ DVD『モールス』 1:02:57-1:03:27. “Will you go steady with me?” “What do you mean?” “Will you be my girlfriend?” “Owen, I’m not a girl.” “You’re not a girl?” “No.” “What are you?” “I’m nothing.”

³⁴ DVD『モールス』 1:29:27.

³⁵ IMDbでは、老いたエリ (Susanne Ruben)、エリの声 (Elif Ceylan)、クレジットされていない俳優 (Robin de Lano) の名前が挙げられている。

³⁶ e.g. 「[エリの瞳孔は] …長円形の。…猫のような」(リンドクヴィスト, 2009, p.342.)、「手と足の指が薄く広がる…。両手の指がポキポキと音をたてて伸び、溶けていく指先の皮膚から長い曲がった鉤爪がとびだす。足の指にも…」(リンドクヴィスト, 2009, p.355.)、「その顔が変わり、唇がめくれて、鋭い歯が暗がりて光る」(リンドクヴィスト, 2009, p.362.)

³⁷ リンドクヴィスト, 2009, p.348.

³⁸ DVD『モールス』 1:15:48-1:16:18.

³⁹ DVD『モールス』 0:48:10-0:49:47. “You going out?” “Is there a choice?” “Please don’t see that boy again. OK?”

⁴⁰ リンドクヴィスト, 2009², p.403.

⁴¹ DVD『ぼくのエリ』 1:42:40-1:43:45.

⁴² DVD『モールス』 1:45:18-1:46:52.

⁴³ リンドクヴィスト, 2009², p.405.

⁴⁴ Wikimedia Foundation. (2024, December 25). *Let the old dreams die*. Wikipedia.

https://en.wikipedia.org/wiki/Let_the_Old_Dreams_Die (2025年10月12日閲覧) および、リンドクヴィスト, 2019, p.656.

⁴⁵ リンドクヴィスト (2019).

- ⁴⁶ リンドクヴィスト, 2019, p.385.
- ⁴⁷ リンドクヴィスト, 2019, pp.641-643.
- ⁴⁸ 英語版 *Let the Old Dreams Die* においては、短編 “Let the Old Dreams Die” のあとに “Afterword to the Swedish edition of ‘Let the Old Dreams Die’” とあるので、書名ではなく短編の題名ではないかと思う。
- ⁴⁹ リンドクヴィスト, 2019, pp.641-642.
- ⁵⁰ リンドクヴィスト, 2019, p.642.
- ⁵¹ リンドクヴィスト, 2019, p.642.
- ⁵² DVD 『モールス』 1:21:58-1:22:00.
- ⁵³ リンドクヴィスト, 2019, pp.346-349.
- ⁵⁴ リンドクヴィスト, 2009², p.365.
- ⁵⁵ 注35を参照。

【参考資料】

書籍

- ・リンドクヴィスト ヨン アイヴィデ. (2009). *MORSE—モールス— [上]*. 早川書房.
- ・リンドクヴィスト ヨン アイヴィデ. (2009)². *MORSE—モールス— [下]*. 早川書房.
- ・リンドクヴィスト ヨン アイヴィデ. (2019). *ボーダー 二つの世界*. 早川書房.
- ・Ajvide Lindqvist, J. (2010). *Let the right one in*. Quercus.
- ・Ajvide Lindqvist, J. (2012). *Let the old dreams die and other stories* (; M. Delargy, Trans.). Quercus.

DVD

- ・Alfredson, T., Ajvide Lindqvist, J., Hedebrant, K., Leandersson, L., & Ragnar, P. (2011). *ぼくのエリ : 200歳の少女*. ショウゲート (発売).
- ・Reeves, M. (Director). (2012). *モールス*. アスミック (発売).

ウェブサイト

- ・一般財団法人映画倫理機構 (映倫) : <https://www.eirin.jp/>
- ・IMDb (Internet Movie Database) : <https://www.imdb.com/>
- ・Ordfront förlag: <https://ordfrontforlag.se/>; <https://ordfrontforlag.se/bocker/lat-de-gamla-drommarna-do/>
- ・Wikipedia (English) : https://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page
- ・Wikipedia (Svenska) : <https://sv.wikipedia.org/wiki/Portal:Huvudsida>; https://sv.wikipedia.org/wiki/John_Ajvide_Lindqvist
- ・WorldCat.org: <https://search.worldcat.org/>

John Ajvide Lindqvist's Novel *Let the Right One In* and
Its Film Adaptations:
Changes in Plot and Expression in Adaptations and Remakes

Naoko Kichijoji

Abstract

John Ajvide Lindqvist's novel *Let the Right One In* was adapted into a film, which was subsequently remade in the USA. While retaining the core plot, various changes were made, particularly concerning the characters' sexuality. With these alterations to both plot and medium, the work's meaning also underwent significant transformation.

Keywords: John Ajvide Lindqvist, *Let the Right One In*, *Let Me In*, vampire, sexuality, adaptation, remake film